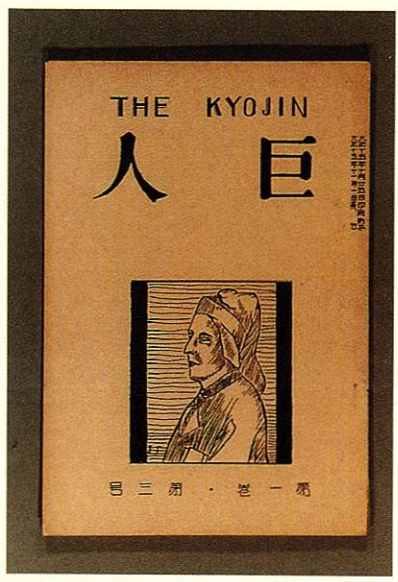


# 44 文化運動

## ■三多摩の地域文化運動

一九〇五年（明治三十八）の日露戦争後から大正時代にかけて、政治、社会、文化などの各方面に、民主主義的、自由主義的傾向がしだいに高まってきた。多摩地域でも、この大正デモクラシーの影響を強くうけた青年や教師たちによって、地域文芸活動ともよばれる文化運動が展開された。南多摩郡忠生村（町田市）には「葎の笛社」や「紅潮社」などの文芸グループが誕生し、東秋留（あきる野市）には「巨人社」ができて、文芸雑誌『巨人』が発行された。八王子市でも『蘭奢待』『少年文林府』『人間派』などのグループ誌が発行された。



『巨人』第1巻第3号（大正15年11月1日発行）巨人社（西多摩郡東秋留村、現在あきる野市）がガリ版刷り雑誌を発行。

一九四五年（昭和二十）八月十五日以降、太平洋戦争後の混乱のなかで、全国各地でぞくぞくと地域文化運動が生まれた。この運動と大正デモクラシー時代の二つの多摩地方の運動を、二〇世紀多摩の文化運動とよぶこととする。文化運動は、人間の全的な開放をめざす自主自立的な、しかも民衆自身の自力でつくり出す運動であって、民衆の自己表現を含んだ自己教育運動である。一八八〇年代（およそ明治十年代）、国会開設や地租税の軽減、あるいは地方自治など、国民の権利と自由平等を求めて燃え上がった自



福生青年団文化部 道芝会の読書会 昭和20年代初頭。

由民権運動では、三多摩は全国的にみても、群を抜いた運動を展開した。この自由民権運動を、三多摩の地域文化運動の第一期とすれば、大正期の運動は第二期であり、太平洋戦争後の運動は第三期の運動といえる。

### ■福生の青年団再建と地域文化運動

太平洋戦争後いち早く、福生で運動に取り組んだのは、青年たちであった。一九四五年（昭和二十）の秋、橋本孝蔵（はしもとこうぞう）、山崎良之助（やまざきりょうすけ）、井上重雄（いのうえしげお）らによって福生青年団が再建され、発会の日に「新しい思想を有するわが郷土の若人は、他の掣肘をうけない青年のみの青年団たる新しき組織のもとに、再建日本の大道に踏み出したものである」という宣言を発した。その後まもなく『福生青年団ニュース』も発行された。また同時に、青年団誌『多摩の礎』（たまのいしづえ）が翌四六年（昭和二十一年）に創刊された。

同じころ、熊川でも青年たちが福生第二国民学校教頭・並木嶋雄の指導によって「ふるさと会」を発足させ、同人雑誌『ふるさと』を発行した。「ふるさと会」は「われわれは青年を学び、青年団を学び、郷土を学び、祖国を学ばなければならない」としたうえで、「青年として、農民として、勤労者としていかにあるべきか」を考えていなければならないと、強い調子で訴えた。

この「ふるさと会」の参加者は、熊川、福生を中心に、青梅町、五日市町（あきる野市）、東秋留村（あきる野市）、瑞穂町、大久野村（日の出町）、西多摩村（羽村市）など西多摩郡内全体に広がっていた。一方、『ふっさ』という個人誌を出していた浜中伴蔵（はまなかはんぞう）（現岩下）が『ふるさと』に合流し、編集を





同人誌『あかざ』第19号(昭和23年11月発行)

担当した。この『ふっさ』と『ふるさと』の合流は、その後の福生の文化活動を生み出すための、一つの源泉ともなったのである。

### ■「あかざ」の活動

一九四六年(昭和二十一年)の夏、十数名の有志によって「文学、演劇、音楽、講演その他あらゆる面にわたり、福生の町の文化向上のために活動を幅広く展開しよう」と、新しい会が発足した。どこにでも生える雑草ではあっても、その強靱な育つ姿に、敗戦のなから立ち上がっていく姿を重ね「あかざ社」と命名された。翌年二月に同人誌『あかざ』第一号を発行し、四八年(昭和二十三年)までつづいた。

「あかざ」の目的の一つは、文学の創作と研究であったが、同時に郷土の民主化を視界に入れていた。「文化を社会生活の中心として、精神的、物質的の両面にわたって、その全体の発達進歩を企図してゆく」その文化主義こそ「あかざ」のめざすものであると、会員の一人は記している。『あかざ』の表紙には、赤を基調とした燃えるような色彩が多く、その志の高さをあらわしていた。

### ■西多摩自由大学など

一九四六年(昭和二十一年)十一月、南多摩郡元八王子村(八王子市)に「多摩自由大学」が開設された。疎開してきていた東大教授有沢広巳を名誉会長として、連続講座を開いたものである。この講座に出席していた人たちによって、翌年七月福生第一国民学校で開講されたのが「西多摩



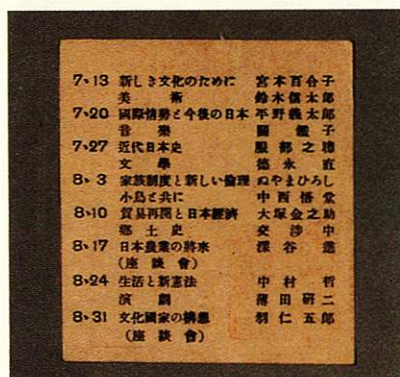
青年団演劇コンクール優勝記念 福生青年団は遠藤頼雄作「河童」を演じ優勝。演技賞を柚木誠一が受賞(青梅、初音座で上演。昭和23年7月8日)。



第一回西多摩夏期大学聴講券・表(昭和22年)



福生青年団会報「理想」No. 9、1950年(昭和25)



第一回西多摩夏期大学聴講券・裏(昭和22年)  
昭和22年7月福生第一国民学校講堂で開設され、講堂はあふれるばかりの聴講生で満たされた。

青年団の演劇活動も、太平洋戦争後の混乱のなかでさかんになった。一九四六年(昭和二十一年)と翌年四七年に、福生第一国民学校の校庭で公演が行われ、はなばなしい活動を展開した。やがて一九五二年(昭和二十七年)に、西多摩郡各地の演劇青年によって、劇団「ひこぼえ」が結成されたが、翌年旗揚げ公演として「原色の街」を一度演じただけで、劇団は解散した。

つていった。

自由大学」である。この講座は西多摩自由懇話会が母体で、全八回の講座に延べ三〇〇〇人が参加し、一大学習文化活動が展開されたのであった。福生や八王子ばかりでなく、武蔵野市、立川市、羽村市など、多摩各地での学習文化活動は、日を追ってさかんな